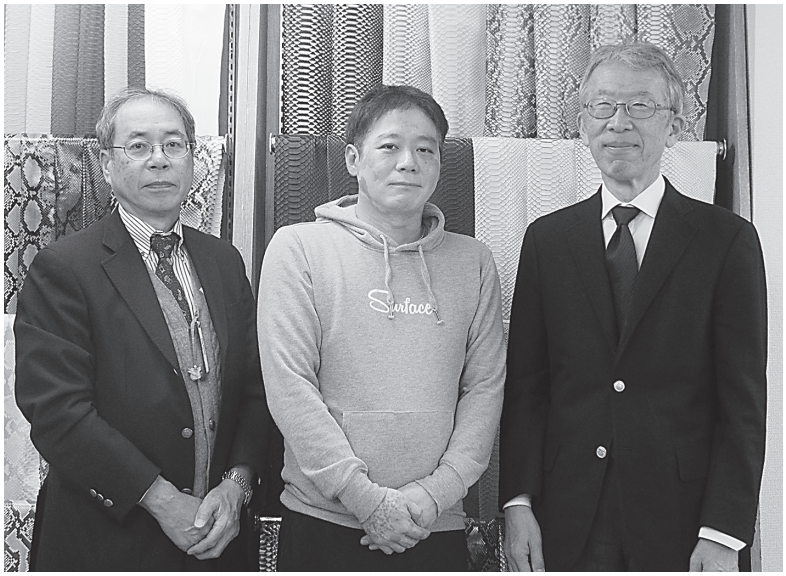
日本エコレザー座談会 ⑫

ワニ、ヘビなど爬虫類に特化したタンナーとして50年以上。その良さを広く伝えていきたい。



左から稲次氏、大橋氏、吉村氏

㈱太閤染革 代表取締役
大橋マブ 氏

NPO法人日本皮革技術協会 理事長
吉村圭司 氏

NPO法人日本皮革技術協会 副理事長
稲次俊敬 氏

吉村　埼玉県草加市は、古くから関東の皮革・革製品の産地として長年の歴史があります。皮革関連の団体は地元地域住民との交流も深く、啓蒙にも力を入れています。そんな中で、爬虫類の革に特化して活躍しているのが、株式会社太閤染革様です。今回の座談会は代表取締役の大橋マブ様にご登場いただきました。早速、お話を伺っていき行きましょう。

昔は爬虫類の革というだけで珍重された

吉村　ホームページを拝見したのですが、御社は50年以上もヘビ、ワニ、トカゲ、オーストリッチなどのエキゾチックレザーに特化して鞣し・染色をやってこられましたね。

大橋　創業は昭和37年（1962年）で、父は最初、爬虫類の皮革問屋さんで働いていました。その時、委託先のタンナーさんに原皮を預けると、原皮が鞣しの途中で、「半分溶けちゃった」と言われ、預けた原皮の半分しか納品されませんでした。皮が溶けるなんてこ

大橋氏

とはそうそうないんですが。

吉村　皮は溶けないでしょうね。

大橋　おかしいと思った父は、バケツを10個買ってきて、薬品屋さんなどからいろいろと聞いて回って、自分で皮を鞣してみたそうです。

そしたら、皮は溶けることなく全部普通に鞣すことが出来たそうです。それがきっかけで、鞣し工場を自分で始めるということになったようです。

父の時代はヘビ、ワニなどの爬虫類の革はとても珍しい革で、今よりもっともっと高級なイメージがあって、爬虫類皮革というだけで売れたと聞いています。いろいろある爬虫類皮革の中で弊社は、ヘビ革を得意にしてきました。

20年前に当社の母体である株式会社太閤から、鞣製染色部門を切り離して「太閤染革」が発足しました。

稲次　ここ草加においてでしょうか？

大橋　いえ、ここに来たのはちょうど10年前です。前工場は埼玉県の三郷（みさと）市にあったのですが、つくばエクスプレスが通るようになったため、区画整理の関係で今の草加市に移動することになりました。ここは工業団地なので安心して操業することができます。

吉村　いまもヘビ革がメインですか。

大橋　ヘビは長年の実績があるので大いに自信はありますが、近年はワニ革が6割くらいで、ヘビ革3割で、他のトカゲやオーストリッチが1割という感じです。

吉村　販売先はどちらの方面ですか？

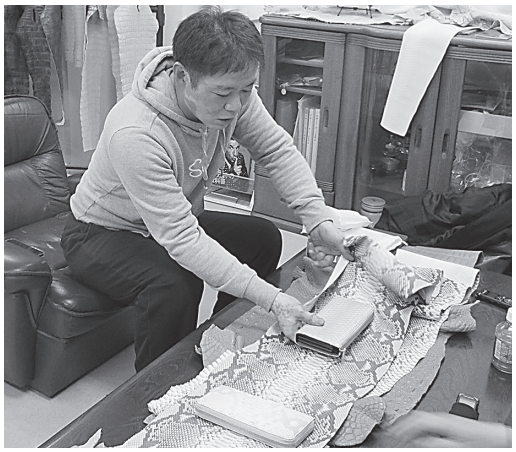
大橋　ほとんどが委託加工なので、弊社が直接販売しているわけではないのですが、ワニ革は多くはヨーロッパ向けに輸出されています。ヘビ革はほぼ国内向けです。

以前は、財布用に黄色いヘビ革をよく染色していました。金運を招くという縁起担ぎですね。ヘビは干支（えと）に入っているので、昔から12年おきにブームが来ると言われていました。

稲次　すると再来年は忙しくなりますね。

大橋　だと、嬉しいのですけど（笑）。でも、残念ながら年々そういうニーズは無くなってきています。一方、ワニの需要はコンスタントにありますが、それでも高額商品ですから景気に左右されることもあります。

吉村　男女別に好みの違いとかありますか。


向き、幅、部位を考慮して抜いていく

吉村氏

稲次氏

大橋　ワニは万人受けするところがあるようで、男性にも女性にも人気があるようです。

一方、ヘビは人によって好き嫌いがあるようです。

吉村　最近ツヤのない革が増えているように思います。カジュアル化の影響ですか。

大橋　昔は爬虫類のバッグや財布といえば、光沢のある革でカチッとしたクラシックな形が主流でした。この光沢のある革はグレージング仕上げを施されていて、メノウの石を使い、革表面を、強い圧力をかけながら磨いて透明感のあるツヤを出しています。ツヤはすごく出るのですが、その反面、革がどうしても固くなってしまいます。

おっしゃる通り、近年のカジュアル化の影響もあり、ソフトな爬虫類皮革が求められるようになり、現在ではツヤの無いマット仕上げが主流になってきています。

ただ、ツヤが無い仕上げと言っても、使用していけば経年変化とともに革らしいツヤは出てきます。

ワニ皮もヘビ皮も本来はデリケート

吉村　爬虫類の鞣しについてお聞きしたいのですが。

大橋　例えば、牛や豚は、ドラムで少量の水の中をグルグル回転させ、革を叩いて浸透圧によって薬剤を革の中に入れる鞣し方です。

陸上の生物は普段肌が外気に触れているので肌が強いため、その衝撃に耐えられます。

ですが、爬虫類はそうはいきません。爬虫類の表皮は普段外気に触れてなく、薄いプラスチックのような丈夫なウロコに覆われています。皮革にする際には、そのウロコを取り除くと出てくる銀面（表皮）を鞣すことになります。

そうして出てきた銀面は、牛や豚と違い普段外気に触れていないウロコで覆われている部分ですから非常にデリケートです。

そのため、薬剤を浸透させるために強い衝撃を与えると、擦れが出てしまったり、傷が付いてしまったりと、とても繊細なので、これを防ぐために水量を増やして鞣します。牛や豚が皮を叩いて鞣す方式だとしたら、爬虫類は皮を泳がして鞣す方式になります。皮を叩けない分、薬品がなかなか中に入っていきませんので、じっくり時間をかけながら鞣していきます。

稲次　時間はどのくらい掛けるのですか。

大橋　原皮から仕上がりまでで、通常2か月半～3か月かかります。

稲次　クロム鞣しですか。

大橋　クロム鞣しもノンクロム鞣しもやっています。近年、ヨーロッパ向けではノンクロム鞣しの革が少しずつ求められてきています。

吉村　現在、爬虫類のタンナーさんって何社ぐらいあるのでしょうか。

大橋　弊社を含めて日本では6社です。

吉村　最近、抱えている問題点はありますか？

大橋　価格の高騰ですね。爬虫類の原皮は全て輸入なので、為替の影響が非常に大きいです。また、

最近は輸送コストが上がっています。薬品や光熱費などのエネルギーコストもどんどん上がっているので、販売価格を上げざるを得ません。

吉村　爬虫類は牛革とかと比べると上げやすいのではないですか？

ワシントン条約に基づき1枚ごとに番号のタグをつけて管理する

大橋　そんなことはないですよ。価格を上げすぎると、「高すぎて扱いきれない」と爬虫類皮革から撤退してしまうメーカーさんが出てくる可能性もあります。使用してくれなくなるのが一番困ります。

メーカーさん達もいろいろと努力してくれているのですが、販売価格に関してはいつも難しい問題ではあります。

吉村　ワニ革は10㎝角のデシ単位ではなく、1㎝幅での取引ですが、1枚でいくらぐらいですか。

大橋　ワニ革はワニの種類で違うのはもちろんのことサイズや等級や仕上げ方法でピンからキリまであります。1枚20万円ぐらいするものもあります。

通常、クラシックのハンドバッグで前と後ろで1枚ずつ使うので、一つのバッグに2匹使います。1個のバッグに4匹使うこともあります。

爬虫類革でバッグなどを製作する場合、向きと幅と部位を考慮しなければなりません。部位というのは、ワニ革の場合、頭と胴回りと尻尾で全てフ模様の形や幅が全て違います。

さらに、牛革や豚革であれば、革が大きいので自由度が効く場合が多いのですが、ワニ革は、幅と向きとフ模様が常に関係してくるので、製造するバッグなどに全ての条件の合った革でなければ使うことが出来ません。

例えば、35㎝幅のバッグを作る場合、30㎝の革では作れない。45㎝の革では、大きすぎて、ワニ革本来のフ模様のバランスが悪くなる。35㎝幅のバッグを作るなら、38㎝前後の革しか使用できないのです。

さらに、傷がない革を避けて、1級のみの革となると、100枚の中から何枚あるのか、という話になります。そうなると、ハンドバッグ一つで何百万円というようになってしまいます。

稲次　それにしても高いですね。

大橋　それだけ希少価値があるということです。

23年9月にLWG環境認証を取得

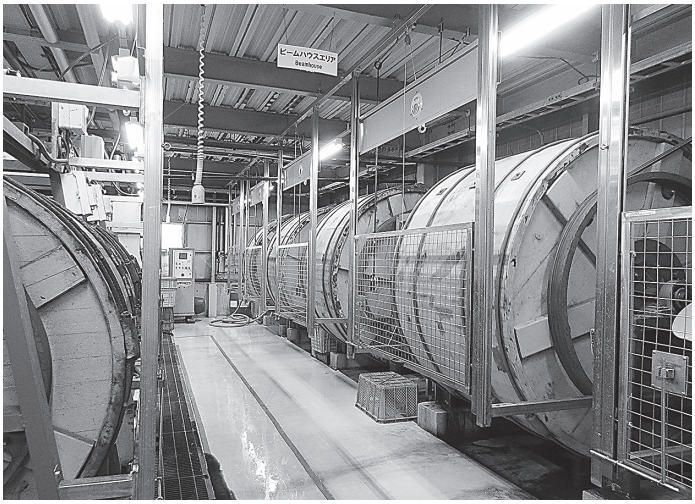
吉村　今回、LWG（レザーワーキンググループ）環境認証を取得

されましたね。

大橋　はい。お陰様で弊社は2023年9月にLWG環境認証を取得し、シルバー認定されました。

LWGとは持続可能な環境ニーズに即した皮革製造を推進すべく、2005年に設立された国際団体です。

革の生産工程で使用する化学薬品の安全性や排水処理、エネルギー使用などの環境対策を審査し、厳格な国際基準を満たした製革業者にのみLWG環境認証が付与されます。



ワニ、ヘビ、トカゲ皮は太鼓をゆっくり回して鞣す

2023年12月現在、日本でLWG環境認証を取得しているタンナー（皮革製造業者）で5社、貿易業者、皮革下請け業者を含めると、9社が取得しています。

ちなみに、LWG環境認証は日本エコレザー認定革のように革に与えられるものではなく、各企業に与えられる認証です。タンナーで言えば、工場に対しての環境認証です。

LWG認証レザーというのは、LWG環境認証を受けている工場で製造された革という意味です。

ただ、工場が認証を受けるためには、六価クロムや高懸念物質などの含有の検査などを行わなければならず、使用禁止物質を使わないなど使用薬品に対する厳格な管理も求められているので、革に対しての直接の認証はありませんが、品質や安全性は確保されています。

LWG環境認証の審査の中の一つにトレサビリティの実施というのがあります。爬虫類皮革はワシントン条約に基づき輸入されていますが、その原材料皮が、どこの養殖場から来て、いつ鞣されて、どの薬品を使用し、どこに販売したかなどを1枚ごとに管理しなければなりません。

薬品に関しては、薬品ごとのロット管理までしています。ヨーロッパでは薬品に対する規制が毎年のように増えていて、使える薬品がどんどん少なくなっているのが現状です。その中で薬品規制をクリアした革作りをしつつ、クオリティーアップもしていかなければならないので、対応がとても大変です。

「革の品質」を認定する日本エコレザーの独自性

稲次　ここで日本エコレザー（JES）の紹介をさせていただきます。大橋さんは日本エコレザーについては非常に詳しい方であることはよく存じ上げています。これまで、JESの種々基準値に基づいて、御社の革づくりを進めてこられた経緯がありますから。

大橋　はい、認定は取得していませんが、日本エコレザー基準に基づいた革づくりは一時期、相当やりました。

稲次　あとは認定をお取りになるだけですね。

大橋　それは考えています。弊社はLWG環境認証もあるので、日本エコレザー認定を付けることにより、さらに付加価値が付くと思っています。ところで、日本エコレザーは普及していますか？

稲次　革と革製品併せて現在1200件ほど認定されています。残念ながら、すごく広まっていると

会社概要
社　名：㈱太閤染革
設　立：2004年
代　表：大橋 マブ
資本金：1000万円
従業員：8名
業　務：爬虫類革の鞣し・染色加工販売
所在地：〒340-0002 埼玉県草加市青柳1-4-19
TEL048-933-9951
https://www.taikohsenkaku.com/

いうまでには至っていません。

大橋　とても言いにくいことなのですが、弊社が取得していないのは、お取引様方から日本エコレザー認定を求められていないからです。

全てのお取引先様ではありませんが、どうしても値段ファーストなところがあり、日本エコレザー認定を受けると、その分販売価格が上がってしまうイメージがあります。

稲次　高くはなりませんよ。認定取得のための新たな特殊な革づくりの必要はありません。認定取得の取得時に製造処方の見直しを行って、コストダウンになったケースもあり、逆に、喜んで頂いている企業もあります。有効・無効の評価ができない薬品が意外と多く使われていますから。

大橋　実際、それはありますね。日本エコレザーは、革にタグが付くのですか。

吉村　タグは自分でつけることになっています。

大橋　付加価値の向上になるタグは付けたいですね。

稲次　いま、インバウンドの方がたくさん来日しています。日本人よりも外国人のほうが環境意識は高いように思われます。日本エコレザー認定のタグが付いていると、それ何っ？ということになります。日本人って変なもので、欧米人が買うと、それ何っ？と興味を持つ傾向があります。

大橋　日本エコレザー認定はクロムフリーだとPRできるのでは？

吉村　それはダメなのです。それは、植物タンニンだけでは世界中で求められる革は作れないからです。従って、日本エコレザー認定は、クロム鞣しでも基準を満たせば、認定が取れます。

大橋　爬虫類に限らず、もっと革の良さを広く伝えていかないといけないですね。

日本エコレザーの6条件

①天然皮革である
②発がん性染料を使用していない
③有害化学物質を検査している
（ホルムアルデヒド、重金属、PCP、禁止アゾ染料）
④臭気が基準値を満たしている
⑤適切に管理された工場で作られている
（排水、廃棄物が適正に管理された工場で製造）
⑥染色摩擦堅ろう度が基準値以上

日本エコレザーのロゴが変わります

従来のロゴ　　新ロゴ

JAPAN ECO LEATHER

Japan Eco Leather

（従来のロゴも当分の間、併用してご使用いただけます）

「日本エコレザー座談会・対談」は
www.japan-ecoleather.jp　の項でご覧いただけます